82. 懐かしい十里木の顔

撮影：昭和35年３月

懐かしい顔が並んでいます。若々しくて潑剌としていました。十里木の顔です。27年前の十里木のご婦人方です。十里木には水がなく、頼朝の井戸と言われた井戸が唯一の水源で、この井戸から水を汲み上げ肩にかついで各家庭に運んでいたのですから、水は非常に大事に使用していたものです。昭和35年４月待望の水道が完成しました。この時の十里木の方々の喜びは大変なもので子どもたちは蛇口を開けては水が出た出たと大ハシャギでした。この日は、水道完成祝いの支度をするので、うれしい顔がそろったところで一枚はいパチリ。

83. 柳端橋の竣工式

撮影：昭和35年５月

昭和31年７月23日この地方を襲った台風は物凄い豪雨を伴って吹き荒れたため河川は氾濫し、大畑橋や柳端橋などいくつかの橋が流失した。それから４年昭和35年５月柳端橋が竣工した。写真は竣工式の模様の１コマです。既に故人となられた当時の町長小林秀也さん、助役の杉山織恵さん、議長の市野昇さんなど想い出の方々が列席されて、小林町長さんがテープカットをされました。

山は、農耕地が多く見えます。左上には深良小学校の校舎が見え、国道246号線をトラックが１台走っています。のどかな田園風景の中で式典が行われました。

84. アシタカツツジの現地調査

撮影：昭和37年５月

昭和36年春、米国植物導入局のクリーチ博士（理学博士、野生ツツジの権位者）が日本の野生ツツジを調査のため訪日して、愛鷹、富士山麓を調査された折アシタカツツジについて「眠れる山の宝」と絶賛された。町では、昭和37年県農業試験場に依頼してこの地域に対するアシタカツツジの学術調査を依頼した。この調査団は県農試場長河合博士、同農試篠原博士、船越技師、村松技師、杉山総務部長の諸先生により実施された。この調査報告は紙面の都合上記述できないので、またの機会に記述しますが、写真の中央の方が調査団長の河合博士です。

85. 七夕豪雨を省みて

撮影：昭和31年７月

昭和33年伊豆地方を襲った狩野川台風は前古未曽有の大被害をもたらせたことは多くの人たちは記憶していることと思います。幸い裾野地方はあれほどの被害を受けたことは無いと言うものの、台風による被害はすくなからずあります。

昭和31年７月23日の七夕豪雨は、黄瀬川の氾濫を招き、大畑橋や柳端橋をはじめ多くの橋が流失しました。黄瀬川から導水している富沢堰は、水門が木っ端微塵に破壊され大被害を受けたのです。この隧道および堰も２億２千余の巨大な事業費が投下されて立派な堰となりましたが、「災害は、忘れたころにやって来る。」と言われています。災害のおこらないように注意を怠らないようにしましょう。

86. 耕うん機けん引車に軽免許が必要

撮影：昭和36年８月

戦後15年、この時代は裾野地方農業の最盛期と言える時代でした。ほとんどの農家で耕うん機を所有していました。しかも農耕用の耕うん機にけん引車をつけて運搬用にも使用されるようになり、馬車、牛車は姿を消しました。こうして一般道路を耕うん機けん引車が通行するようになると交通上の危険が伴うので、交通法規が改正され、昭和36年11月から軽免許が必要となりました。農協では、農業者に軽免許を取得させるための実地講習会と取得試験を現地で行っていただくよう警察署にお願いして実現することになり、各地区ごとに小学校の校庭を借用して夏休み中に実施することになりました。

この写真は富岡地区の免許取得実施試験の１コマです。

87. 婦人会の視察見学の思い出

撮影：昭和36年９月

昭和32年９月１日、富岡村、須山村が裾野町に合併して、文字通り中駿大同団結が成りました。戦後の急速な復興による国民生活の合理化、高度成長をふまえて、町は昭和35年に工場誘致条例をつくり、工業立町をめざしました。そのトップをきって矢崎電線工業が昭和36年設立、37年には三菱アルミが着工しました。このころトヨタ自動車工業の誘致が始まっておりましたが、地権者の理解を得るには長い日時がかかりました。

婦人層の理解を得るために、トヨタ自動車工業の会社見学が企画され、バス５台に分乗視察を行いましたが、帰途浜松市にある航空自衛隊浜松基地の見学も、この計画に盛り込まれていました。飛行機に触れたことなどない人たちがほとんどだったので、見学時間も延び、感激もひとしお深かった様子でした。

88. 観光資源開発調査の記念写真

撮影：昭和35年10月

借楽園は茶畑滝頭にあり28名共有地だったが、昭和33年共有より裾野町に遊園地とするため無償貸与されたので、町は遊歩道や休憩所を整備し遊園地とした。

園内には不動の滝があり、高さ10mから流れ落ちる景観はすばらしい。

当時裾野町は工業立町とあわせて、観光資源の開発にも力を入れ、昭和35年には町内（現市内）全域にわたり観光資源の調査を行った。

写真は、借楽園案内板の前で記念撮影、当時の町議会経済委員および観光協会役員の方々で、現在既に半数近い方が故人となりました。懐かしく偲ばれます。

89. カヤギ刈りのころ

撮影：昭和27年11月

カヤギとは、手入れがよく届いていない、山林や林道沿いや沢沿いなどに生えている竹笹のことです。昔（戦前）の農家では、秋の取り入れ、麦まきが済むと、モヤ切り（タキギ取り）や落ち葉かきをします。落ち葉かきをするのに、まずカヤギ刈りをします。このカヤギは、農家にとって利用が多く、たい肥小屋の囲いや屋根に、風よけ垣に、または蔓性作物の支柱などに利用したものです。この娘さんは、炭釜の火入れの口火用にするために、カヤギ刈りをしていました。写真で見るとは大違いで、きれいな顔や首筋などはバラ掻きになり、大変に重労働で嫌な作業でした。

90. 農業視察研修の思い出

撮影：昭和33年12月

戦後農業の大革命だった農地解放も軌道に乗り、混乱した食糧難もようやく落ち着き、戦後の農政を支えた農地委員会、食糧調整委員会は解消して総合農政を目的として農業委員会が誕生したのです。

当市においても昭和32年中駿大同団結による裾野町の誕生により農業委員会も裾野町農業委員会になりました。このようにして農業委員会は農地法によるものと農政を扱うことになったのです。

これは、今後の裾野町農業の発展を如何に進めたら良いかの研究のため静岡県農業試験場を訪問視察研修の折の記念写真です。思い出の懐かしい顔ぶれです。

91. 岳麓の美人の思い出

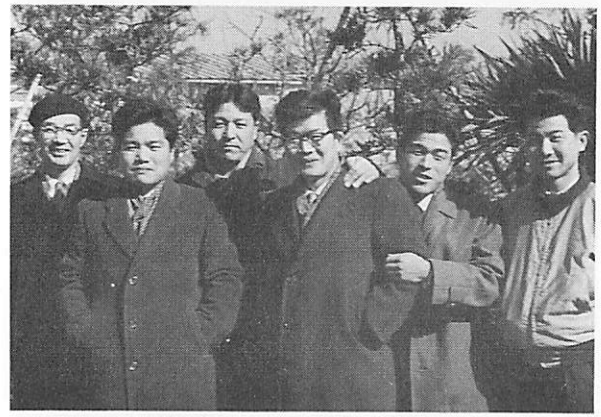
撮影：昭和30年１月

よく古老の言われた例えに「富士山の見える処に美人はいない」と言われましたが、これは世界に比類の無い富士山の美しさを強調する例え言だと思います。

広報すそのの愛読者の皆さんはこの写真をご覧になってどのように感じられたことでしょう。戦後10年を経たお正月、まだまだ満ち足りてはおりませんでしたが、清潔で潑剌とした笑顔でお正月を祝う様子は質素ながらも、バックの深水画伯の描く日本美人とほんとによく似ていると思いませんか。時代は違っても古来より伝統の日本美人の真の美しさが見る者に心の安らぎさえ感じさせます。

92. 農技連のメンバーたち

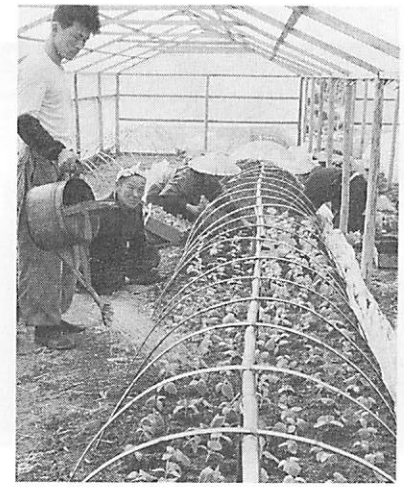
撮影：昭和34年２月



昭和32年９月１日、須山村と富岡村が裾野町に合併して中駿５ケ村の大同団結がなされたのですが、当時の産業はなんと言っても農業中心でした。米をはじめすべての農産物は増産の掛け声にあおられていた時代です。町の経済課勧業係と農協の技術員との構成で「裾野町農業技術指導協議会」が設置されて農家の人たちの指導に専念し、数々の業績を挙げました。県主催の堆肥増産共進会に富沢部落が優勝、苺の高冷地育苗による促成栽培、芝栽培を農作物に編入、つつじの年内開花早咲き栽培に全国で始めての成功、ぶどう巨峰の栽培やプリンスメロンの栽培を導入等々農家経済の向上と安定に尽力したものです。皆さんにも馴染みの深い当時のメンバー、いい男ばかりでしょう。左端のベレー帽が筆者です。

93. 懐かしいキウイのハウス育苗

撮影：昭和33年３月



産業の技術革新に伴い農業技術の発展も著しく、皆さんは既にご承知のようにハイテク技術によって農産物の栽培も工場化して企業生産がなされつつあります。しかし、あのころの農作業が懐かしいですね。こんなこと言ってると年齢がわかってしまうけど、当時このような作業を３月初めにやっていた農家は篤農家だったのです。ビニールハウスの中で２月上旬に播種３月上旬移植育苗３月下旬ハウス内定植４月下旬から収穫市場出荷という栽培形体で、より多くの収入を上げ得た農家です。親子夫婦揃っての作業がうらやましく、また、懐かしくしのばれます。

94. 十里木共同給水施設の竣工式

撮影：昭和35年４月

広報すその昭和62年４月15日号「ふりかえる裾野」82号に掲載した“十里木の婦人たち”で紹介しましたが、十里木には水道がなく、頼朝の井戸と言われた１つの井戸に頼っていました。裾野町に合併した当初の事業として水道の施設を計画したのですが、少数人員のため水道の布設は不可能でした。他の方法を色々と検討したところ、山村僻地共同給水事業を採用していただき補助事業として実施したのです。昭和35年４月待望の水道が完成しました。これは竣工式のスナップですが、ブナ原生林の十里木公園で喜びの竣工式を挙行したものです。

95. いしくのわざ

撮影：昭和33年５月

石工とは、石の細工をする職業の人たちで、いしく、石屋さんと呼ばれます。いしくと呼ばれる人たちがいつの時代に生まれたかは知りませんが、機械のない時代に大工事を世に残した歴史が忍ばれます。大坂城をはじめ、名城の石垣積みなどはその最たるものでしょう。私の父も元は石屋でした。石切場の高い所に登り、命綱に身をゆだねて火薬を仕掛ける穴を堀り、爆破して大きな石を落とし、ケンチという石を切り出して名古屋方面へ送り出していました。谷間にこだまする金槌の音、石切唄が子どものころの思い出に今もはっきりおぼえています。現代社会では、重労働を必要とする職業を希望する若者が非常に少ないと聞いていますが、今後どれ程機械力が進んでも、人の手を必要とする職業は希少価値的職業と言えるのではないでしょうか。

96. 景ケ島・依京寺について

撮影：昭和31年６月

佐野川の上流には、びょうぶ岩から景ケ島上下の300ｍにわたって溶岩が水食され、奇形を見せる渓谷ですが、景ケ島の中央には依京寺があり西行法師手植の松があり、コケむした石仏や石塔に囲まれている。この当時依京寺の堂は荒れるにまかしていたが、現在は心ある人々の手により幾分か修復されているが、心ない人たちがきてコケむした石仏の顔を持ち去ってしまい、今では顔のついた石仏はほとんどなくなってしまった。

この境内の溶岩にはヒトツバシダが生育しており、植物学上からも貴重なものと言われるので是非とも保護されたい。

97. 黄瀬川の増水

撮影：昭和31年７月

昨年85号にも記しましたように、昭和31年７月23日の七夕豪雨は物凄い雨量で、黄瀬川の増水はいまだ例を見ない程でした。五竜の滝は滝の上と滝壺の落差がほとんどわからないくらいの有り様で、この増水に市内の多くの橋が流失したことは、まだ記憶に生々しく残っております。この写真はあくる日の朝撮影したもので、現在の消防署の裏手佐野堰のすぐ上流です。この時点では随分減水してはいるのですが、まだその濁流は目を見張るほどでした。昨年は幸い台風の上陸もなく、被害もほとんどありませんでしたが、今年も平穏であることを祈ります。

98. 下刈り競技大会の思い出

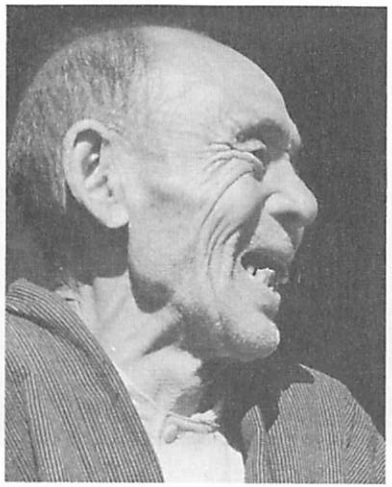
撮影：昭和31年８月

外国材の輸入が多くなるにつれ、我が国の林業には多大の影響を与えました。裾野地方の山林は、零細面積と林道の未整備という悪条件により、立木を買う業者はいなくなってしまいました。このため山林育成の熱意がなくなり山は荒れる一方で、有った道さえも通行不可能の状態になっている始末です。

ふりかえれば、このころは山林育成に熱心でした、県でもこれを奨励して「山林育成下刈り競技大会」を富士宮市榎原山地で開催することになり、各地区から選手が選抜され、中駿地区からは茶畑グループが出場しました。それはそれは猛暑の日で、絶え間なく流れ出る汗をぬぐう間もなく、大きな鎌を振るって健闘しました。今は昔の思い出です。

99. お年寄りとの語らい

撮影：昭和30年９月



今年も敬老の日がきました。私も、70歳老人の仲間入りという年齢になりました。今は、食生活がよくなったせいか、それとも重労働が少なくなったせいか、あるいは健康管理が向上したせいか、とにかく人間の寿命が延びて、平均寿命80歳代となりました。しかし、昔の人たちだって喜寿・米寿の長命の方たちも少なくなかったのです。私の祖父は85歳、祖母は83歳、父は90歳の長命でした。長命のお年寄りの風貌は、本当にいいですね。目じりやほほに刻まれた深いしわ、年輪を重ねた歯・あご、いかにも年の功を思わせます。もっともっと長生きをしてください。

100. 大野原所見

撮影：昭和33年10月

「さすが、大野原ってヒレエナア、このへんはナ、チャンバラの撮影がよくあるんだとヨ、カッタルクネエカ、一休みするか、ボウズまだ腹あへラネエカ。」こんな話し声が聞こえる初秋です。今日は久しぶり親子そろってのピクニック、そのいでたちがいいですね。おかあさんの肩にかついだバスケットの中にはどんなご馳走が入っているのかな。肩から下げたおとうさんのカバンには何が入っているんだろう。用意万端コウモリまで用意して、この親子にはきっと良い日の楽しい１日を過ごすことができたでしょう。

101. 運搬具の移り変わり

撮影：昭和35年11月

昔の農家の運搬具と言えば、人力で引く荷車、馬に引かせる馬車、役牛に引かせる牛車があったが、馬車･牛車とは言わず、馬力･牛馬力と言ったものです。戦前は牛馬力などほとんどなく、馬力が主力で、このため農家には１戸に１頭の馬が飼われていたものです。この馬に代わって、役牛が登場したのが戦後です。役牛は馬に比べて温和のため、女・子どもにも扱いやすいことと、馬が不足して入手が困難になったためです。しかし、役牛は動作や歩行が遅いので、大農家は馬を入手し、馬力を使用したものです。こうした運搬具も、現在ではほとんど見られなくなりました。

102. 十里木の今昔

撮影：昭和32年

昭和29年須山小学校が全焼し、同中学校の一部が焼失しました。しかし、翌30年には早くも須山小・中学校新築校舎が落成しました。十里木部落は、須山本村より約６㎞も遠く離れた山の上にあったため、ここには分校が建っていました。部落の戸数11戸、したがって分校の全校生徒は、写真で見るこれだけでした。昭和32年須山村は裾野町と合併したのですが、このころもまだ十里木は陸の孤島などと言われていました。

今では、別荘地、ゴルフ場、遊園地、サファリパークなど一大観光地となり、また工業団地も加えて注目をあつめています。

103. 新年初仕事の日

撮影：昭和33年１月

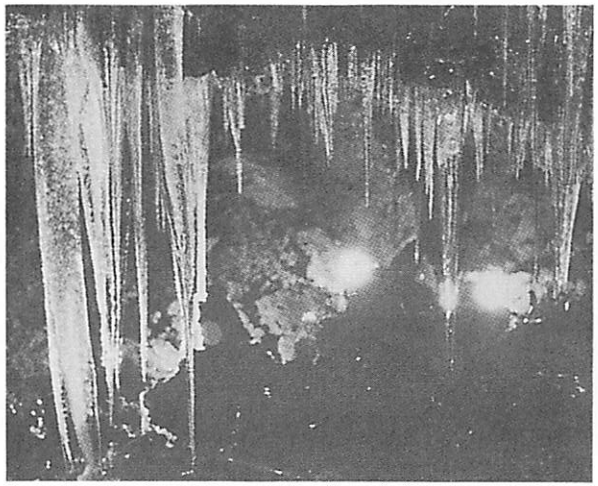
小春日和の暖かい正月でしたが、妙な図柄の写真になりました。

昨年（昭和32年）９月、富岡村と須山村が裾野町と合併して中駿五か村と言われた谷間の小さな村々が合併して大きな裾野町ができあがったのですから、明けて昭和33年の正月は穏やかなよい正月を迎えました。

この日正月４日、この地方の農家では新年初仕事の日です。この日は、仕事を早じまいして仕事の成果に白カシの枝を立てて、豊年満作を神様にお願いしたものです。場違いな神様へのお祈りが一つ余分に加わりました。

104. 十里木氷穴とその利用

撮影：昭和35年２月



神秘とでも形容したいような暗黒の中の光、将来に向かって光明を射光するかの鮮烈さ、鎗（やり）の穂先を思わせるするどい光の変化、この神秘と冷たさと寒さにおもわず身震いをするここは十里木高原の氷穴。

当時は、この氷穴を利用して農業の先端技術の試験が行われました。水仙、アマリリス球根の冷凍による開花促成、都わすれの苗冷凍貯蔵による開花促成、夏菊苗の冷蔵による開花促成等々の試験が行われ、それぞれの大きな成果があげられました。これらの努力が現在の農業技術にみな生かされているのです。

105. 懐かしい町役場職員

撮影：昭和35年３月

昭和35年は、故小林秀也氏が１月10日裾野町長に就任された年で、須山では、初めて水稲栽培が始まりました。

また、裾野町にボーイスカウトが設立され、カラーテレビの放送が開始された年でもあります。

町役場の職員の皆さんも若かったですね。この方々も、現在は既に故人となられた方も数人おりますし、停年で退職した方も７～８人おります。皆さんの中にも、懐かしい人たちがおられることと思います。いつまでも、元気で頑張ってください。

106. 農場山はどこに

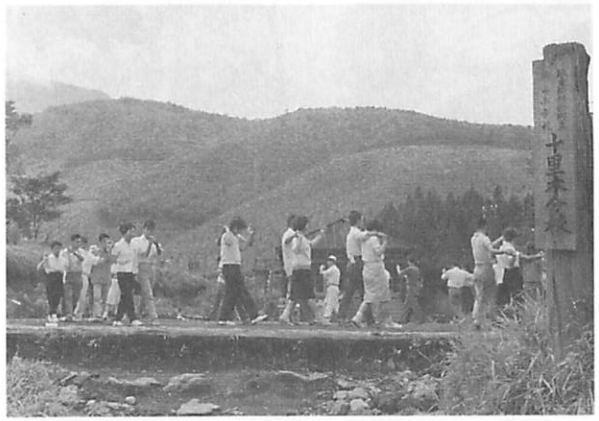
撮影：昭和33年３月

ここは、思い出やなじみの深い方も多いことと思います。私たちの子どものころは農場山といいました。春になると近くの小学校の子どもがたくさん遠足に来ました。道の両側にお茶畑が広がり、あちらこちらに桜の花が咲き、道端にはレンゲ、タンポポ、オキナ草など野の花が咲き、丘の上にはワラビが生え、１日を楽しく遊ぶことができたところです。

今は、宗教団体の経営する高等学校の敷地となり、正面の丘陵地帯はゴルフ場となりました。これも時の流れと言うことでしょうね。

107. 十里木の今昔Ⅱ

撮影：昭和32年５月



全校生徒10人前後の分校ですから校庭も狭小で、山あいの十里木ならではの情趣豊かなところに立地していました。

昭和32年９月１日に掲げられた「駿東郡裾野町立須山小学校十里木分校」の看板が懐かしいですね。哀愁をそそるかのような門柱が心を打ちます。

この日は、どこの青年会だったか忘れましたけれど、お兄ちゃん、お姉ちゃんがおみやげに本を沢山持って慰問に訪れ、スクエアダンスなどを踊って楽しくすごしました。昭和32年５月ごろです。もやが越前岳をかくしていました。

108. 裾野音頭に寄せて

撮影：昭和32年５月

新俚謡裾野音頭ができたのは、昭和８・９年のころではなかったでしょうか。よい歌だったので、私たちも盛んに歌ったものです。

富士の裾野にネ３年３月
　　しんぼ駿河の17むすめ
仇にゃ咲かないヤッコラ山つつじ
（ハヤシ）　トコドッサイ
　　ドッサイナー

この写真の方々は、裾野音頭を踊ったのではありません。多分、合併祝賀の余興に出られた佐野元町の方たちです。この写真を見ながら、裾野音頭を思い出しました。今有志の方々が、この裾野音頭を復活すべく準備を進めているそうです。裾野の市民全部が歌え踊れるように、普及指導をしていただけるよう頑張ってください。

109. 竹林さまざま

撮影：昭和32年６月

これは、何を写したように見えるでしょうか。雪の朝の竹やぶに見えますかね。

昭和30年代私が写真に凝っていたころ葛山の竹林の一角で写したものを、暗室内のいたずらで仕上げたものです。竹やぶというと、暗いイメージが先に立ちます。多分、窪地などに竹やぶが多いからではないでしょうか。そんな暗いイメージを変えてみたかったためです。もっとも、最近では２億余の大金の置き場所となり、大勢の人たちが大金捜しフィーバーで大騒ぎの起きた竹やぶもありましたね。まるで夢のようなほんとの話…。

110. 五竜の滝昔のつり橋

撮影：昭和30年４月

昔の裾野音頭の歌詞に「夏の涼みはネー　五竜の滝の　かゝるしぶきに思ひはぬれて　わたるつり橋ヤッコラなつかしや　トコドッサイドッサイナ」

五竜の滝には、つり橋がつきものでしたが、たしか昭和31年７月23日の豪雨、（七夕豪雨）により流失してしまいました。この時は大畑橋をはじめ、佐野川にかかっている橋が何か所も流失したのです。その後大畑橋や他の橋も復旧しましたが、つり橋は長い間復旧できませんでした。今は、立派な太鼓橋とともにつり橋も復旧して、裾野市中央公園にふさわしく名勝地の一端を担っていますが、「災害は忘れたころにやってくる」と言われます。十分に気をつけましょう。

111. タバコ栽培のころ

撮影：昭和29年９月

写真のこれはなんだかわかりますか。タバコの葉の選別をしているところです。

食糧難の時代もようやく過ぎて、このころの農業収入の中ではタバコ栽培は高収益を上げたうちの一つだったのです。しかし、その労力は大変なもので、苗作りからすべて専売局の技術指導を受け、指定時期には収穫できる葉の枚数まで登録をしたのです。芽かきのときなどタバコのヤニで作業衣などべっとりになり、あとの洗たくが大変だったそうです。

葉を収穫して１枚１枚縄に差し込み、乾燥庫につるして、寝ずの番で火力乾燥を行う、葉の選別ともなればやれやれです。それでもまだ整理して一時貯蔵をし、専売局から出荷日が決定して検査を受け収納ということになるのです。大変な過重労働でした。